七月五雲能

（延期公演）

七月十七日（土）
午後一時始

演目の解説

能「嵐山」（あらしやま）

帝やっての命で嵐山の桜を見に臣下が京のなのでの来ます。桜の名は遠所は吉野山の会下はの桜嵐山に下い、桜の山の移植御幸れたは遠いので、こ言の木葉を交わを清めるのし老夫婦に は、吉野の桜はの下の桜葉を移植を老人の の西の空の枝を去る臨桜をし人言 そ 守の、後桜の勝つ手にして行きすをまるとし た 舞 出舞男神の二の蔵を王権現がれます。瓢 現つ神が女神の木 舞 ています。 豪 快な 舞 い 爽

能「忠度」（ただのり）

桜の須磨の浦を訪ねた僧は、一本の夕暮れ木下で老人に出会います。これにの宿を請う僧しに老人は、暮るのなり宿ほど相応しい宿は花陰ほど暮れ行く陰は

あ自僧しをあは、「宿る宵の木の下の言っらが」宿る、「のり行く陰の言っ忠藤ととまこ花陰ほど相応しい宿は た度原いせいのを今宵の木の下の た 去ら俊と俊うば、「宿る宵の木の下の 戦 ど成名成忠花行陰ほど相応しい宿は の 現 に乗と度やき今宵の木の下の た 最れ 言り、縁のの歌を宵の木の下の 後 る 伝 ある口のて主木の下の の 有 と、都にとずさなのい宿の 様 の ま にて 上 知 み、ま陰は を ま 欲 つ 事 ま 語 す。 し 夜 が 木 て り 部 公 と ます。 六 達 弥 太 姿

能「葵上」（あおいのうえ）

光源氏の正妻葵上は得体の知れない病で臥せっていまして、後の御霊の怨霊が憑いてて、桜の院の巫女に憑いてい ま 雀 の 臣 下 が 巫 女 に 憑 る と 梓 か た 院 の 音 に 憑 る と 弓 て 高 の け 音 に 憑 る と 弓 を 高 の け 音 に 憑 る と 弓 を 高 の け 音 に 憑 る と 弓 を